

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K21721

研究課題名（和文）美的労働と社会階層の計量分析

研究課題名（英文）Quantitative approach to aesthetic labor and social stratification

研究代表者

太郎丸 博（TAROHMARU, HIROSHI）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：60273570

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：かつては労働と言えば肉体労働をイメージしたが、現代では顧客や取引先、同僚とのコミュニケーションの重要性がますます増している。コミュニケーションにおいては、書いたり話したりする内容だけでなく、その業務にふさわしい服装、メイク、髪形、立ち居振る舞いをすることが求められる。労働のこのような側面を美的労働という。美的労働の重要性は社会学では広く認められてきたが、その実態については、あまり調べられてこなかった。特に質問紙を使った調査では美的労働について明らかにされてこなかったため、このプロジェクトでは、質問紙調査でどうやって美的労働について調べるのか、その方法について研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仕事のときの身だしなみや外見が重要であることは広く知られているが、企業がそれをどのようにコントロールし、望ましい企業イメージやアイデンティティを作ってきたのかについては、十分にわかっていない。この研究では、まず第一に、企業による労働者に対する外見の統制とそれが労働者に与える影響について検討した。第二に、そもそもどのような場合にどのような身だしなみや外見が「適切」、または「不適切」と考えられるのかを調べた。外見のコントロールはTPOによって「正解」が変わってくることはよく知られているが、具体的にどのようなルールやパターンが存在するのかはわかっていない。この研究ではそのようなパターンを調べた。

研究成果の概要（英文）：In the past, labor was associated with physical work, but today, communication with customers, business partners, and colleagues has been becoming increasingly important. In communication, one is expected not only to write and speak, but also to dress, make up, style one's hair, and behave in a manner appropriate to the task at hand. These aspects of labor are called aesthetic labor. Although the importance of aesthetic labor has been widely recognized in sociology, its detail has not been well investigated. In particular, surveys using questionnaires have not clarified aesthetic labor, so this project studied how to examine aesthetic labor in a questionnaire survey.

研究分野：社会学方法論、社会階層論、数理社会学、科学世論

キーワード：印象操作 文化資本 社会階層 コミュニケーション サーベイ実験 写真調査

1. 研究開始当初の背景

体型や服装、髪型、化粧、グルーミング(髭や体を清潔に整えること)立ち居振る舞い(以下、容姿と総称)といった事柄が、階級や社会階層と密接に関係していることは、P. ブルデュエのハビトゥス/文化資本論をはじめとして、社会学ではよく知られている。高級ブランドの店員、政治家、銀行員、俳優のように職種によってそれぞれにふさわしい容姿があり、そのような容姿を整え、適切な自己呈示を行うことは、美的労働と言われている。美的労働にはそれに見合ったハビトゥスや経済力が必要とされる場合があり、社会的地位を可視化すると言われている。文化資本研究では読書や芸術、クラシック音楽などの教養が取り上げられることが多いが、容姿にかかわるハビトゥスも無視しえない。

美的労働については散発的に事例研究がなされているものの、測定の困難さゆえか、研究は限られている。近年、女性の痩身度や顔の美しさには、本人の収入や職業的地位を引き上げる効果があることが実証されつつあるが、美的労働についてはまだわからないことが多い。また、美的労働研究は社会階層とハビトゥスの関係をとらえる切り口であるだけでなく、企業組織の自己呈示という位置づけ方もできる。企業は自然人と違って身体を持たないので、個人とは少し違った形で自己呈示する。企業の場合、身体の代わりに、商品や店舗、ロゴ、広告などを通して自己呈示することになるが、従業員の美的労働も、企業の自己呈示の一部となる。それゆえ、個人が自分の容姿を気にするように、企業も従業員の美的労働に関心を持つだろう。日本のようにオンザジョブトレーニングが重視される企業風土の下では、従業員がもともと持っているハビトゥスよりも、企業によるコントロールや教育が美的労働の質に大きな影響を持つかもしれない。

2. 研究の目的

こういった容姿と社会階層の関係、美的労働の詳細について明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

予備調査として、2021年に10組の大企業の採用担当者にインタビューした。対象となる企業は主力業務の産業や扱う商品が異なるように選んだ。インタビューは質問紙を使いつつ、適宜補足質問を行った。インタビュー時間は平均で1時間程度であった。

美的労働の測定法を開発するために行われたインターネット・モニター調査を行った。2022年3月に実施され、21~64歳の有業の男女の登録モニターを母集団とし、性別と従業員上の地位(正規、非正規、自営)の分布が2021年の労働力調査(年間平均)に近似するように割り当てサンプリングした。有効回答数 999、回収率 39%(スクリーニング調査の依頼数を分母として計算)であった。調査の詳細は報告書(<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/275440>)を参照。

2024年3月に、2回目のインターネット調査を行った。対象者は日本に在住する20~59歳の男女で、性別と年齢は2024年1月1日の人口推計に近似するように割り当て、学歴については、2020年の国勢調査に近似するように割り当てた。有効回収数は1000票で、手の写真調査については、391枚回収した。

4. 研究成果

第一に、社会階層による外見・容姿の違いを検討した。外見・容姿の指標として、1 アクセサリー、整髪料、化粧等の利用頻度、2 理容・美容店の利用度、3 頭髪・体毛の手入れ時間、4 顔、スタイル、等への自己評価が用いられた。学歴、職業や従業員上の地位はこれらに対してほとんど有意な効果を及ぼさないが、世帯収入(3を除く)、仕事の自律性(1, 4だけ)文化資本(ほぼすべて)のプラスの有意な効果が示された。

第二に、職場での規則による労働者の外見に対するコントロールの仕方について検討した。潜在クラス分析の結果、1 爪やアクセサリーに関する規則は高い確率で存在するが、服装や靴、化粧、髪に関する規則はあまりない職場、2 外見に関する規則がほとんどない職場、3 ほぼすべての項目に関する規則がある職場、4 服装と靴に関する規則は高確率であるが、その他の規則はあまりない職場、の4つに分類された。3の職場は特に、販売やサービス職に多く、労働者自身も外見に気を配っていることが示された。

第三に、「外見を整えられる人は有能で信頼できる」といった考え方(外見観と略称)の男女差が検討した。外見観は4項目で測定されたが、因子負荷量も独立変数の効果も有意な男女差はなかった。男女とも接客頻度が高く、制服のある仕事をしている人ほど外見観が強く、60歳代でそれ以下の年齢層よりも強かった。

第四に、2021年6~7月に実施された採用担当者による外見評価について検討した（この調査の詳細も上記報告書を参照）。採用担当者は応募者の外見や立ち居振る舞いをチェックしていることが多いが、特に表情とあいさつの仕方が注目されていた。また、一般消費者に接する機会の多い業態ほど外見に関する研修も厳しくなされている傾向が見られた。こういった外見のコントロールはブルデューの言うような卓越化のためになされているというよりは、ゴフマンの言うような場の秩序を保つためと考えられた。

第5に制服が労働者を権威主義的にするのか検討した。衣服や髪形などの外見が私たちの意識に影響を及ぼすことはよく知られている。だとすれば、仕事のために制服を着用したり、身だしなみを整えたりすることも、私たちの意識に何らかの影響を及ぼすのではないか？これが本報告の問題関心である。

脱工業化に伴い、ノンマニュアル職が増加すると、職場でのコミュニケーションの重要性が高まるが、対面的なコミュニケーションにおいては、衣服や髪形のような非言語的な情報も、当事者たちの意図にかかわらず、さまざまな意味を持ちうる。様々な可能性が考えられるが、この報告では、「服装を指定され、同僚と同じような服装をしているほど、権威主義的態度が強まる」という仮説を検証する。

データは2022年3月に行ったWEBモニター調査。対象者は20~64歳の有業の男女である。権威主義の尺度は、以下の意見への賛否を5択でたずね、その平均値を用いた（ $\alpha = .80$ ）。「権威のある人々にはつねに敬意をはらわなければならない」「以前からなされてきたやり方を守る事が、最上の結果を生む」「伝統や慣習にしたがったやり方に疑問をもつ人は、結局は問題をひきおこすことになる」「この複雑な世の中で何をなすべきか知るいちばんよい方法は、指導者や専門家にたよることである」。同僚との服装の類似性は、仕事時の服装をたずね、「私服（服装自由）」「私服だが服の種類などが指定されている（黒いパンツに白いシャツとか、スーツ着用とか）」「制服や作業服が決まっている」「その他」の4択で答えてもらい、「その他」は自由回答をもとに他の3つのいずれかに割り振った。

分析結果

図1のように服装への統制の度合いが強くと、同僚との服装の類似性が高いほど、権威主義尺度の平均値が高いという結果であった（ $F = 5.5, p = 0.004$ ）。この傾向は職業、性別、年齢、学歴、等を統制しても同じであり、仮説は支持された。この結果は、服装が人々の自律性と関係しているという通説をデータで支持するものと言える。

第6に、身体変容寛容度と年齢、学歴、権威主義の関係について検討した。服装や髪形、アクセサリの装着、等々は自己表現の一部であるが、社会規範によって厳しく統制される場合がある。このような身体の外見を自由に変容させることに対する寛容度を、身体変容寛容度と呼ぶとすると、これについては、個人差があると考えられる。そこで、どのような人が身体変容寛容度が高いのか検討してみた。仮説として、権威主義的な人ほど身体変容寛容度が低い、ということが考えられる。日本では、美容整形や入れ墨のように不可逆性の高い身体改造は合法的ではあっても、社会的には忌避される傾向がある。異性装や髪を黒以外の色に染めることも、これまでの日本の「伝統」に反すると考えられがちである。しかし、近年、自己表出主義（Inglehart and Baker 2000）の高まりにより、これらを許容する人々は増加しているように思えるが、古い社会秩序を維持したい人々にとっては、上のような可視性の高い身体変容は、社会秩序を乱す逸脱行為ということになるのかもしれない。それゆえ、権威や伝統に無批判に同調しようとする人ほど身体変容寛容度が低いと考えられる。

身体変容寛容度は、「あなたの家族が次のような行動をとったとしたら、あなたはどれくらい抵抗を感じると

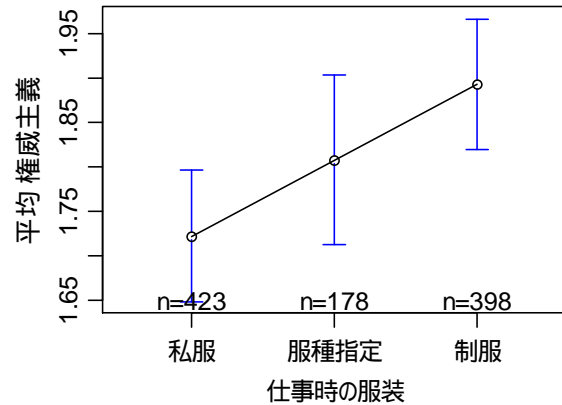


図1 服装による権威主義の違い

	Model 1
(Intercept)	6.23 *** (1.19)
男 TRUE	-0.18 (0.24)
年齢 - 49.34	-0.07 *** (0.01)
(年齢 - 49.34)^2	0.00 (0.00)
教育年数	-0.14 * (0.07)
卒業 TRUE	0.04 (0.70)
権威主義	-0.13 *** (0.04)
R^2	0.05
Adj. R^2	0.05
Num. obs.	999

「思いますか。」という質問で、以下の4項目に関する評価で測定する(5点尺度)。「髪を金髪に染める」、「異性装(男装・女装)をする」、「鼻にピアスをあける」、「腕にタトゥー(入れ墨)をいれる」。

分析の結果、若いほど、学歴が低いほど、権威主義的でないほど身体変容寛容度が高いという結果が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 太郎丸博	4. 巻 28
2. 論文標題 メタ分析によるセクハラ大学教授の平均年齢と身分の推定	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都社会学年報	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 太郎丸博
2. 発表標題 外見・容姿から見た階層文化
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会（追手門学院大学，11/12）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 太郎丸 博
2. 発表標題 日本における肥満と社会的地位の関係
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 太郎丸 博
2. 発表標題 日本型雇用システムの変容と若者のキャリア・結婚
3. 学会等名 日本学術会議東北地区会議主催 公開学術講演会『人生100年時代の雇用問題』（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西倉 実季・山本 耕平
2. 発表標題 量的調査から見える「外見統制」の多様性：職種横断的な美的労働研究に向けて
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会（追手門学院大学，11/12）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田 裕
2. 発表標題 外見管理に対する態度の男女差：多母集団同時分析の適用
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会（追手門学院大学，11/12）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松尾 寛子
2. 発表標題 採用選考場面における応募者の装いや立ち居振る舞いへの評価の現状
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会（追手門学院大学，11/12）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 太郎丸 博
2. 発表標題 制服は労働者を権威主義的にするか？ 美的労働と社会意識
3. 学会等名 関西社会学会第75回大会（大和大学、5/25）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

美的労働に関する調査報告書
<http://hdl.handle.net/2433/275440>
美的労働と組織の美学 Witz, et al. 2003
<http://sociology.jugem.jp/?eid=1028>
美とディスタンス？ 欧州5か国における外見評価 Kuipers 2015
<http://sociology.jugem.jp/?eid=1027>
「美的資本の蓄積と活用に関するダブル・スタンダード」 Sarpila, et al. 2020
<http://sociology.jugem.jp/?eid=1025>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	池田 裕 (Ikeda Yu)		
研究協力者	松尾 寛子 (Matsuo Hiroko)		
研究協力者	永瀬 圭 (Nagase Kei)		
研究協力者	西倉 実季 (Nishikura Miki)		
研究協力者	阪本 浩太 (Sakamoto Kota)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山本 耕平 (Yamamoto Kohei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関